

、第185回「元気に百歳」クラブ 俳句サロン「道草」開催

11月20日の行田市での合同吟行会が、無事に終了してホッとした後は、台風19号の来襲で遅れていた、クラブ誌20号（最終刊）発刊記念の例会が、11月23日の寒い雨中でしたが、これも滞りなく終わり、そして12月2日（月）、締め括りの一つ「道草」の開催です。住田先生はじめ元気なメンバーが「新橋ばるーん」に集合しました。私たち生徒の出席者は、芦川創風さん、井上蒼樹さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、高瀬荻女さん、原晶如さん、森田多佳さん、本間傘吉さん、白然の10名でした。まだ年末というほど、雰囲気が出来上っている訳ではありませんが、今年の「道草」も今回でおしまいということになります。ひとつ大きな深呼吸をして、「本年最終月の俳句作りに傾注しよう」と、皆さん、元気に取り組みました。

住田先生は、開講のはじめに、行田市での合同の吟行句会は、初めての体験であったこと。お陰様でこれも無事に終わられたことを話された後、行田市の皆さん全員の句を短冊に書いて、後日、送付して下さったことを話して下さいました。清流句会の皆さんも、きっと喜んで下さったことでしょう。さて、本日の句会です。住田先生が、「では、もう出来ていると思いますが・・・」と仰って、席題となる次の季語を提示されました。これまで雑談もされていた皆さんも、一瞬、静かな世界に入っていました。三つの季語の提示を受けて、皆さんが詠んで提出した三句が発表され、その中から選句され、最終的に、天賞句と最多得票賞（☆印）の栄に輝いた句は、次の通りです。

席題1. 「片時雨」又は「朝・夕時雨」

- | | | |
|-----------------|----|------|
| ◎『山の端の茜に染まる夕時雨』 | 白然 | 天2☆6 |
| ◎『片時雨大堰の橋を渡るまで』 | 荻女 | 天1 |
| ◎『朝時雨出掛け損ねて恨む空』 | 傘吉 | 天1 |

席題2. 「湯豆腐」

- | | | |
|--------------------|----|------|
| ◎『湯豆腐や幸せと言う薬味つけ』 | 明峰 | 天1☆5 |
| ◎『湯豆腐やあふあふ口の閉じられぬ』 | 多佳 | 天1 |

席題3. 当季雑詠の自由題句

- | | | |
|---------------------|---------|------|
| ◎『年惜しむ行事の多し元気者』 | 和感 | 天1☆5 |
| ◎『着ぶくれて年経るごとに背をまるめ』 | 枯葉（投句） | 天1 |
| ◎『微睡ぬ至福の刻や冬日和』 | 歌多音（投句） | 天1 |
| ◎『埼玉の広かりし空冬茜』 | 晶如 | 天1 |
| ◎『妻送る白衣の富士の冷氣かな』 | 清助 | 天1 |

（道人の一句）

湯豆腐の煮立つを待てず盃重ね 住田道人

席題1. では、白然の句「山の端の茜に染まる夕時雨」が、天賞二つと、最多得票賞（☆印）をいただきました。辺りに降る時雨とは別に、遠く茜空に染まった夕刻の山の端の景を詠みました。次に荻女さんの句「片時雨大堰の橋を渡るまで」も、天賞一つを獲得されました。この句は、「あの堰に架かる橋を渡ってしまえば、止んでしまう片時雨なんだけどな・・・」という、そこに現れた臨場感に共感を得たのだと思います。もう一句、傘吉さんの句「朝時雨出掛け損ねて恨む空」も、天賞一つを獲得されました。朝の雨が億劫で出そびれ、その後雨が止む。「もう少し早く止んでくれたら」と、恨みがつのる空をじっと見る・・・わかりますね。選外でしたが、月草さんの句「朝時雨すぐさまやみて鳥の声」も、高得票を獲得しました。鳥の声が聞こえて来て、「あらっ雨が止んでいるのね」という体験は、皆さんにもよくある景ではないでしょうか。

席題2. では、明峰さんの句「湯豆腐や幸せと言う薬味つけ」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。明峰さん特有の中七と下五、「幸せと言う薬味」とは……。見事に惹きつけられますね。多佳さんの句「湯豆腐やあふあふ口の閉じられぬ」が、天賞一つを獲得しました。この句は中七、下五の「あふあふ口の閉じられぬ」に、熱い湯豆腐鍋の臨場感が溢れています。「あふあふ」に共感が集まりました。選外になりましたが、荻女さんの句「湯豆腐や切り出しにくい話あり」も高得票を獲得しました。この句も内に流れる心の微妙な動きが捉えられています。湯豆腐に向かい、お箸だけが動く静かな二人が見えてくるようですね。

席題3. 自由題句では、和感さんの句「年惜しむ行事の多し元気者」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。この時期、夜な夜な活躍する元気者が思い起こされます。「頑張れよっ！」と、声を掛けたくなりました。次に投句していただいた枯葉さんの句「着ぶくれて年経るごとに背をまるめ」が、天賞一つを獲得されました。この句に描かれた寒さがつのる日の姿、「上五と下五」を、「中七」が見事に言い切っています。遣る瀬無さの滲んでくる句ですね。これも投句された歌多音さんの句「微睡ぬ至福の刻や冬日和」も、天賞一つを獲得されました。この句はスケジュールの空いた冬日和の日の午後、つい、うつらうつらとした時間、それは本当に至福の時間でありましたでしょう。「よかったですね」と申し上げたい気持ちになりました。投句されたもう一句、清助さんの句「妻送る白衣の富士の冷氣かな」が、天賞一つを獲得しました。この句は、中七の「白衣の富士の」を、如何に捉えるかにあります。「妻が外出するのを、玄関表まで出て送る。その時に今や白雪を抱いた富士には冷氣が走っている」というのが本意でしょうが、妻を送るが白衣に重なりますと、早合点をしてしまいますね。清助さんの意図は、富士山の冷氣にあると思いますね。もう一句、晶如さんの句「埼玉の広かりし空冬茜」が、天賞一つを獲得しました。この句は、まだ記憶に新しい行田市への吟行旅の一コマでしょう。武蔵野の空の広さと、帰り際に電車の窓に広がっていた夕焼け空の暮れていく情景が、描かれています。印象深い一句です。選外になりましたが、多佳さんの句「冬空に鉄塔の先突きささり」が、高得票を得ました。曇天の冬空もあれば、この日のように雲一つない晴天の冬空もあります。鉄塔の先が尖って見える感覚が生まれるのは、冬の特徴でしょうか。

二次会は、久方ぶりに「魚や一丁」にお邪魔しました。行田吟行のこと、今日の「道草」のこと、もう年末であることなどなど、和やかに話が弾んでいました。また来年、この元気を維持し、充実した「道草」を楽しんで、よい俳句タイムを過ごしましょう。

白然記